

新・歴史を さわがせた 女たち

永井路子



さわがせた 女たち

永井路子

文藝春秋





新・歴史をさがせた女たち

昭和六十一年十一月十五日 第一刷
昭和六十二年二月二十五日 第二刷

定価 一〇〇〇円

著 者 永 井 路 子

発 行 者 西 永 達 夫

発 行 所 株式 文 藝 春 秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三一二三

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

© Michiko Nagai 1986

Printed in Japan

ISBN4-16-341020-1

目次

謎の女帝第一号・推古天皇	五
幻の女王・額田王	二九
美貌の女帝・元正天皇	五一
王朝の悪女に乾杯！・伊勢	七五
王朝の長寿VIP・藤原彰子の系譜	九九
王朝の落ちこぼれ女御・藤原元子	一二一
謎の女富豪・上西門院統子・八条院暲子	一四五
美女に愛された美女・小督	一六七
平家一門の肝っ玉母さん・平時子	一八九
体験的戦国経営学・京極お初	二一三
優雅なる殺生石・東福門院和子	二三五
大奥スキヤンダルの女王・絵島	二五九
あとがき	二八二

挿画・カット
A D 大内 秀
坂田 政則

新・歴史をさわがせた女たち

謎の女帝第一号
推古天皇



女性大使第一号、女性大臣第一号、女医第一号……。とかく女性の第一号は話題になる。
が、そんな騒ぎを、

「何サ、そんなこと珍しがって」
せせら笑っておいでの方が、多分、いるはずである。彼女の言い分を聞こう。

「大使だの大臣なんてケチくさい話はおよし。この私をごらん、私は女帝第一号よ」

うわッ。これはすごい。しかも女帝はさらに仰せられる。

「エジプトのクレオパトラみたいな大昔の話を除けば、あたりを見廻してみても、中国にも朝鮮半島にも、女帝はまだいなかった。つまり、私は日本どころか、東洋の女帝第一号なのよ」

その女帝とは推古天皇。おおせのとおりである。中国に則天武后が出現するのは六九〇年だから推古さまの方が、たしかに先輩だ。新羅にも、善徳女王（六三二即位）、真徳女王（六七即位）の二人の女帝がいるが、推古の即位は五九三年だから、これもこちらが、ひと足お先である。しかし、今から約千四百年前のお方とあって、その生涯は謎にみちている。

「はて、あなたはというお方か？」

と申しあげれば、女帝は艶然と笑って仰せられるであろう。

「私の謎？ 解けるものなら解いてごらん」

では、勇気を出して、謎にセマってみることにしよう。

推古天皇のもとの名は額田部皇女。その名のしめすように、欽明天皇の皇女である。母は重臣、蘇我稲目の娘、堅塩媛。このころの蘇我氏は新興の大豪族、どんどん頭角を現わし、娘を欽明天皇のきさきとしたのを手はじめに、以後、歴代天皇と娘を結婚させている。

額田部皇女は、こうして生れた蘇我氏の血をひく才姫サマ。大変な美女で、しとやかだっ

た。そこを見こまれたか、十八歳で結婚する。相手は同じく欽明天皇を父とする皇子——と聞いて、

「エエッ！ 近親相姦？」

などと眼を廻してはいけない。そのころは、母が違えば、結婚することに何の差し障りもなかったのだ。

これには、当時の結婚生活を考えに入れなければならない。そのころの男性の多くは、妻^{つま}訪婚^{びんこん}といって、結婚相手の女性を訪ねてゆき、一夜をともしては又自分の家に帰ってくる、という形式をとっていたようだ。今夜はA家のA嬢、明日はB家のB嬢、といったことはもちろんある。ABどころかCDEF……XYZ。マサカ！ それほどではないにしても複数の妻がいる。つまり別居結婚なのである。子供が生れれば、それぞれの妻の家で育てられるから、父親が同じでも、A家の子とB家の子との間には、きょうだいという意識がない。少し離れた所で生活していれば、顔をあわせることもほとんどなかったのではないか。だから、年頃がくればお互いを結婚相手として考えても不自然ではなかったのだ（その代り母が同じ兄妹が恋をすれば、これは今と同じ近親相姦できびしい制裁をうけた）。

では、天皇の場合は？ あるいは、普通と違うかもしれない。そこがどうもはつきりしないのだが、少なくとも、中国の皇帝のように、ハーレムを作って、おきさをひと所に集めていた、というのではないようだ。だから、プリンセス・額田部が幼少のころ、どこに住ん

でいたのか、実のところは、はっきりしない。

「結婚するまでの私が、どこにいたかわかる？」

もし女帝にこう尋ねられたら、頭をかいてひきさがるよりほかはないのだ。美女だったというほか、彼女のことはほとんどわかっていない。ただ、最近の学者の研究では、お母さんの堅塩媛の実家である飛鳥の里のどこかであったに違いない、ということになりつつある。彼女をめぐる第一の謎は、千四百年たった現在、少しずつ解かれはじめているようだ。

さて、結婚した後、額田部がどこに住んだのか。一説には、耳梨山みみなしのほとりだともいう。夫の譯語田淳おさだのぬ中倉太珠敷なぐらのふとたまきのいたのは、百濟の大井くたら おおいというところで、これも一説によれば現在の橿原市かしはらだというから、訪ねてくるには手ごろな距離である。

ところで夫のオサダノヌナクラ……という舌を噛みそうな名前を憶える必要はない。この皇子は、額田部と結婚してまもなく天皇になる。敏達天皇びだうがそれである。

この結婚と即位の關係はちょっと微妙である。すなわち、史料を整理してみると、

五七一年 欽明（額田部の父）死

額田部結婚（十八歳）

五七二年 敏達即位

という順になる。欽明天皇がなくなったので、天皇家と縁の切れるのを恐れた蘇我氏が、有力な後継者であるオサダに慌あわてて額田部を押しつけたのか、オサダが蘇我氏の支援を取り

つけようとして額田部と結婚し、その力をバックに、即位に成功したのか。このあたりは第二の謎といってもいいのだが、とにかく、美少女額田部が、重要な切札の役目を握っていたことは確実である。

さて、第三の謎は、両者の夫婦仲である。蘇我氏は以前から仏教信者だった。が、敏達はこの宗教にあまり理解をしめさなかった。額田部は蘇我の血をひいているから、もちろん仏教を信じている。

——だから、二人は宗教的信条を異にしていた。

と見る人もいるのだが、額田部は夫との間に二男五女をもうけている。二人の仲はかなり睦まじかったのではないか。じつは敏達には、額田部よりも先に妻としていた女性が何人かいた。即位して四年めに、その中の一人、息長氏出身の広姫が皇后（第一夫人）になるが、翌年広姫が死ぬと、他の夫人を押しつけて、彼女が皇后になる。あまりにあわただしい皇后交替劇で、何か怪しげなものも感じさせられるが、ともあれ母の実家の力がものをいったのではないか。それとも、宗教的信条を超えて、美しい彼女は敏達の心をとりこにしていたのか……

もっとも、ここで宗教の問題をココロの問題とみるのは考えものだ。当時仏教反対の急先鋒は、旧豪族中最大の有力者、物部氏だった。物部氏は、新興勢力の蘇我氏が異国の仏を尊崇するのが気にいらなかったらしい。そこで逆に敏達を説き伏せ、仏教追放の詔を出させ、蘇我氏の造った仏殿を焼き、仏像を投げ棄ててしまった。

ところが間もなく天皇は病氣になってしまった。一方の蘇我氏は当時稲目は死んでその子の馬子うまこの時代になっていたが、この馬子も病氣になった。そこで、

「私の病は、仏の力に頼らなければ癒りません」

と言ったので、敏達も、馬子のみに仏教を信じることを許した（ただし、他の人々の仏教入信は依然として禁じたままであったが）。そのおかげで、馬子は健康を取り戻したらしい。どうもこのような経路を見ると、敏達は物部・蘇我の両勢力に挟まれて揺れ動いていたような趣おもむきがある。額田部も、二人の愛情はともかく、蘇我側の利益代表者としては心の安まらな

い日を送っていたのかもしれない。

ところで、敏達自身もやがて病が重くなって死んでしまう。三十の半ばに達しないままに額田部は未亡人になったのである。

「オカワイソウニ……」

と言え、しかし、彼女は答えるであろう。

「何言うのさ。ほんとの私の時代がくるのはこれからなのよ」

強がりではない。たしかにそうなのだ。

「後家のがんばり」

というのは、後世の言葉だが、どうもこれは日本の伝統らしいのだ。夫のいる間よりも、むしろ夫の死後、俄然、女は強くなる。夫の分を含めて、彼女が一族の権威の象徴になるか

1985



「まるで
矢に当った雀だな」



らだろうか。これ以後の額田部の存在はまさにそうだった。それも、かなり血なまぐさい謎につつまれながら、彼女は歴史のヒロインへの道を歩みはじめるのである。

*

敏達の死の直後から、物部と蘇我の対立は露骨になる。葬儀に参列した蘇我馬子は武装した姿で弔辞を読んだ。それを見た物部氏の総帥守屋が嘲笑した。

「まるで矢に当った雀だな」

小柄な馬子が大きな太刀を帯びているのを笑ったものらしい。もっとも太刀だけでなく、矢も背負っていたとすれば、まさに矢の当たった雀そのものだ。ともあれ、葬儀の場でも、油断なく武装していなければならぬほど事態は緊張していたのだ。

今度は守屋が弔辞を捧げる番になった。馬子をからかったものの、その仕返しを考えると、彼も気が気ではない。恐怖に襲われ、手や足をぶるぶる震わせながら弔辞を読んだ。

すると馬子がすぐさま言った。

「体に鈴をつけたら、いい音で鳴るだろうよ」

悲しいお葬式の雰囲気など、どこかへ吹っ飛んでしまふ状態だった。

『日本書紀』では敏達の死の直後、橘豊日皇子（欽明と堅塩媛の子、額田部の兄）が即位したと書いているが、実際にはそうすんなりときまったものではないらしい。敏達の皇子はたくさんいた。つまり天皇候補者はウヨウヨいたのだ。その中で台風の目の役をはたしたのが、実は額田部そのひとだったのだ。

では「台風の目」はこのときどうしていたか。ひたすら亡き夫、敏達のなきがらの側に侍って祈り続けていた。当時は天皇が死ぬと、正式に埋葬するまで、かなりの期間殯宮（もがりのみや）というのを作って遺体を安置し、そこでさまざまの儀式を行うことになっていた。きさきたちは当然その主宰者である。額田部はこの殯宮に籠（こも）ったまま、敏達の霊を葬いつづけていた。

ところが、そこに突然、一人の男が現われ、殯宮に飛びこもうとした。

「何をなさる」

門を守っていた三輪逆みわのさかという男が、彼の前に立ち塞ふさがって叫んだ。

「どこへ行こうとなさるのか」

「知れたこと、額田部姫に会いにゆく」

「会ってどうなさる」

「俺の心を打ち明けるんだ。俺の恋を、愛を」

エエッ。とんでもない。亡き夫の喪に服しているきさきに、愛を打ち明けるなんて！ 血

迷ったかと思えるが、男は真剣であった。そう叫んだ彼は、穴穂部皇子あなほべ、同じく欽明天皇の

息子だが、額田部と母は違う。母は蘇我稲目の娘、小姉君おあねぎみ。つまり異母兄妹だから、結婚の

資格はないわけではない。

それにしても、あまりにも非常識！

その詮索は少し後にして、事件の経過を追ってみよう。

三輪逆は必死で穴穂部を撃退した。

「なりませぬ。お帰りください」

「うぬっ、お前なんかにそう言う権利はないっ。門を開け」

「だめです」

これを七度もくりかえしたというから、かなりの揉みあいもあったのだろう。力ずくで中

に押し入ろうとした穴穂部は、額田部を手ごめにしても、わがものにしようと思つていたらしい。

逆の抵抗にあつて、遂に中に入れずじまいだった穴穂部はぶんぶんして蘇我馬子と物部守屋に言った。

「逆は俺に抵抗した。失礼な奴だ。第一、あいつは、殯の庭で、自分だけが心をこめてお仕えしているおかげで平和が保たれている、というような弔辞を捧げている。思いあがりだ。あんな奴は殺してしまおう」

と、馬子と守屋は、

「御心のままに」

と答えた。もつとも二人の答には微妙なニュアンスの差があつたようだ。馬子はここで反對するといよいよ事めんどうになると思つて、言葉の上だけで「お好きなように」と言つたらしい。が、守屋の方は、穴穂部と組んで事を起すチャンス到来、と思つたようである。

はたせるかな、穴穂部と守屋は兵を挙げた。三輪逆を討つという名目だが、その動きを見ると、どうやら、皇位についた用明打倒が本心だったようだ。逆は逃れて三輪山の本拠に籠つたが、これも危いを見て、近くの額田部の別荘に逃げこんだ。しかしとうとう彼とその子供二人は殺されてしまった。

何とも血なまぐさい話だが、それにしても、服喪中の額田部に、穴穂部が迫つたとはどう